

令和 2 年 6 月 24 日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02756

研究課題名(和文) 訳学書と実例 - 小田幾五郎のハングル口上書案と朝鮮語学書との比較 -

研究課題名(英文) The Translation textbook and the practical example -Comparison of ODA Ikugoro's verbal notes of Korean alphabet and Korean language textbook-

研究代表者

許 秀美 (KYO, SUMI)

龍谷大学・文学部・准教授

研究者番号：50612826

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、小田幾五郎と朝鮮の倭学訳官らとの間でやりとりされた実例の史料が語学書に与えた影響について考察し、語学書と実例との影響関係を明らかにするとともに、語学書の言語資料としての価値を究明したものである。

本研究の代表者は、小田幾五郎が実際に編集した語学書「講話」を入手した。本資料には、朝鮮語による本文の他に朝鮮語の音価をあらわすためのカナ表記や記号などの書き込みがみられる。朝鮮語の音価についての書き込みは、小田幾五郎自身によるものであり、これらを分析することによって、韓国国内の文字資料にはあらわれない音韻的特徴を明らかにした。これら成果は、朝鮮語音韻史の資料として学界に提供した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日朝間の外交の舞台で実際に使われた生きた史料と語学書の照合に着目した本研究により、その成立経緯が解明され、語学書と実例との影響関係や語学書間の系譜関係が明白になる。日本で編纂された語学書には、朝鮮語の音価をあらわす書き込みが見られるが、これらを分析することによって韓国国内の文字資料にはあらわれない音韻的特徴を明らかにすることができる。

研究成果の概要(英文)：In this research, I considered how the historical paper of the practical example, which was a conversation held between ODA Ikugoro and the Korean official translators, influenced on the language textbook. I have traced the relations between the language textbook and the practical example, thus I found out the importance of the language textbook as a text corpus. The representative of this research obtained Kowa, the language textbook which was actually edited by ODA Ikugoro. In this book, I can see some notes and symbols in Japanese so as to represent Korean phonetic value, besides the body text in Korean. The notes of Korean phonetic value were written by ODA Ikugoro himself. Analyzing this notes, I revealed the phonological characteristics which were not seen in the domestic written materials in South Korea. I contributed our outcomes to the academic society as the materials of Korean phonological history.

研究分野：人文学、朝鮮語学書

キーワード：朝鮮語学 対馬宗家文書 小田幾五郎 講話 朝鮮語かな表記

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、江戸・明治期に対馬や薩摩で編纂された朝鮮語学書類の成立過程を解明するための研究が活発になり、江戸期のその他の朝鮮語学書類との比較対照だけでなく、対馬宗家文書等の歴史資料の記事との比較対照研究の成果も陸続と発表されてきた。本研究の代表者も対馬宗家文書の記録類などの歴史資料を調査し、江戸後期から明治初年まで広く朝鮮語学書として使用されてきた小田幾五郎著「講話」との比較対照をおこない「講話」に収録された文例の題材となった事件に対馬宗家文書等の歴史資料から特定し、文例の成立過程の一端をあきらかにした。(許秀美：2016)

研究を進めていく中、今までに所在は確認されていたものの、長年未公開であったため入手がかなわずにいた「講話」の写本を入手することができた。この写本は、江戸期に朝鮮語通詞として活躍した小田幾五郎が編集したもので、小田幾五郎の末裔にあたる大浦望人司所蔵であり、現在は鍵屋歴史館において保管・管理されていたものである。

鍵屋歴史館本は、跋文に「講話 全 1冊 写本 天明四甲辰五月編集小田幾五郎」との記述があり、編集者および編集時期が明記されている点で極めて資料的価値が高く、この種の研究者は、この資料の公開を長年願ってきたものである。

本研究の代表者は、この度新しく入手した「講話」(以下、鍵屋歴史館本)に見られる、小田幾五郎による書き込みを分析し、表記・音韻・文法・語彙にわたって、その言語的特徴を検討し、言語資料としての価値を究明しようとした。

2. 研究の目的

新しく入手した鍵屋歴史館本には、朝鮮語による本文と日本語による対訳の他に小田幾五郎自身による書き込みが見られる。これら書き込みは、朝鮮語の音価をあらわすためのものであり、カナ表記や記号などがもちいられている。本研究においては、鍵屋歴史館本に見られる書き込みを分析し、韓国国内の文字資料にはあらわれない音韻的特徴を明らかにすることを目的とする。

また、本研究の成果は、学会発表や論文発表をとおして、この分野に携わる研究者一般が利用できる形で広く学界に提供する。

3. 研究の方法

鍵屋歴史館本の文献学的検討および言語学的検討を実施する。また、テキスト本文を翻字入力し、データベースと索引を作成する。文献学的検討においては、「講話」の京都大学文学部所蔵本(以下、京大本)、沈寿官家所蔵本(以下、沈寿官本)、ロシア東洋写本研究所アストン文庫所蔵本(以下、アストン本)との照合作業をおこなう。言語学的検討においては、語学書類(「全一道人」,「朝鮮語訳」,など)との照合を実施し、「講話」における小田幾五郎の書き込みの言語的特徴を考察する。

4. 研究成果

(1)鍵屋歴史館本簡介

上下2巻1冊、表紙に「講話 上下 全」と書かれた題箋が付されている。扉に「講話 乾坤全」とあり、上下巻とも、首題に「講話 上」,「講話 下」とある。

本文は上巻14丁(半葉7行)、下巻24丁(半葉7行)。上巻の最終頁には「天明四年辰五月編集 小田」とあり、下巻の最終頁には、「天明四年辰五月編集 小田幾五郎」とある。上下最終頁の書付の後には、「二姜之書」の落款があるが、「二姜」とは、小田幾五郎の号である。

本文は、すべて朝鮮語で書かれているが、京大本、沈寿官本、アストン本において漢字表記されている部分には朝鮮語の左側に漢字を付し、日本語対訳は、朝鮮語の右側に付してある。

本資料で最も注目すべきところは、小田幾五郎による書き込みである。この書き込みには、本文の修正・加筆と朝鮮語の音価をあらわすためのかな表記や記号などがもちいられている。

「講話」の著者および作成年度については、京大本・沈寿官本・アストン本には何ら明記するものがないが、鍵屋歴史館本に「天明四年辰五月編集 小田幾五郎」とあることから、小田幾五郎が天明4年(1784)5月までに編集をおえたものであることがわかる。小田幾五郎は、寛政1年(1779)から天明5年(1785)まで長崎勤番御雇通詞として長崎に在任しているため、鍵屋歴史館本は、長崎勤番時代に作成されたものとおもわれる。

(2)小田幾五郎の書き込みについて

小田幾五郎の書き込みには、欄外への書き込み、朝鮮語の音価をあらわすために朝鮮語に付したかな表記、朝鮮語の有声音化をあらわすための濁音点が見られる。また、朝鮮語の語頭複子音に用いられる「ㄴ」に似た記号(以下、「ㄴ」印)や、横線、縦線、そして朝鮮語の間に日本語の促音「ッ」を挿入した例が見られる。

書き込みの中で最も多く見られるのは、朝鮮語に濁音点を付したものである。これらは朝鮮語子音の「ㄱ, ㄷ, ㅂ, ㅅ」が鼻音の後ろや母音の間で有声音化することをしめすものであるが、同じ環境下であっても濁音点が付されていないところも多く見られる。

「ㄴ」印は、後続する子音が濃音化することを示していると推測される。語頭や激音の前では、促音表記がつかわれるのに対し、「ㄴ」印は、語中や流音の前で主につかわれている。

「-」横線と「」縦線は、朝鮮語の声調にかかわるものと思われるが、例外も多く含まれて

いるため、さらなる検討を要する。

(3) 欄外への書き込み

欄外に見られる朝鮮語発音に関する書き込みは、上巻に6箇所、日本語訳文に関する書き込みは、下巻に6箇所見られる。朝鮮語の発音に関するものは上巻にのみに見られ、下巻には見られない。上巻における朝鮮語発音に関する書き込みは、「・」(アレア)と上向二重母音「ㄱ」の音価に関するもので、表題文字の発音を「古」と「今」に分けて、古音、今音を示したものとおもわれる。

「・」(アレア)

「・」は、語頭にあらわれる例が延べ15例、非語頭にあらわれる例が延べ26例見られる。欄外書き込みのとおり、語頭音節では、「・」を「才段」のカナで表記した例は見られない。

「・」の本来の音価を最も長く保っていたとされる語頭鼻音下においても「才段」のカナをもちいた例は見られず、すべて「ア段」のカナがもちいられている。小田幾五郎が欄外に書き込みをしたのは、「・」の音価について、古音である「才段」の音を意識しつつも、この時代に「ア段」の音に変化していることをしめすものであり、これは、鍵屋歴史館本が編集された天明4年(1784)には、語頭における「・」の非音韻化が完了したことを示しており、語頭における「・」の非音韻化が完了時期を特定する根拠を提供するものである。

上向二重母音「ㄱ」

上向二重母音「ㄱ」の音価について、欄外書き込みでは、「工段」のカナをもちいるとしている。本文にあらわれる例を見てみると、「工段」のカナだけではなく、イ段のカナ+「エ」や「ヨ」などももちいられている。

「ㄱ」の音価について、「工段」のカナや「ヤ」をもちいた例は、鍵屋歴史館本より以前に成立した「全一道人」や「朝鮮語訳」においても見られることであり、「工段」をもちいることがこの時代にとって「今」をあらわす新しい音ではない。注目すべきは、語頭に「ヨ」がもちいられた例であり、語頭に「ヨ」をもちいた例は「全一道人」や「朝鮮語訳」には見られない。これは、ハングル表記を前提とした発音が生まれてきていることを示していると考えられ、恐らく小田幾五郎は文字通りの発音を古音と認識し、文字を離れた実際の発音を今音をとらえたものだとおもわれる。

(4) 濁音表記

鍵屋歴史館本の朝鮮語本文には、日本語の濁点を付しているところが多数見られるが、これは、日本語の濁点をもちいて有声音で発音されたことを示したものとおもわれる。濁点を付した子音は、「ㄱ」, 「ㄴ」, 「ㄷ」, 「ㄹ」, 「ㅂ」, 「ㅅ」であり、上下巻合わせて414箇所みられる。

濁点を付した例は、鼻音字のうしろが235例と最も多く、その次は母音間が169例、流音のうしろが5例見られる。その他の例も5例見られる。

鼻音字のうしろと母音間において「ㄱ」, 「ㄴ」, 「ㄷ」, 「ㄹ」, 「ㅂ」, 「ㅅ」が、有声音で発音されたことを示すために濁点を付しているが、注目すべきは、鍵屋歴史館本には、母音間の「ㄱ」に濁点を付している例が1例見られることである。母音間の「ㄱ」が濁音表記された例は他の朝鮮語カナ書き資料には見られない。これは、当時の日本語「力行」の濁音が有聲性だけではなく鼻音性も有していたためである。鍵屋歴史館本に母音間の「ㄱ」に濁点を付した例が見られるということは、鍵屋歴史館本が成立した時期には、日本語濁音の鼻音性が失われてきていることを示すものである。

(5) 促音表記

鍵屋歴史館本には、「ㄱ」, 「ㄴ」, 「ㄷ」, 「ㄹ」, 「ㅂ」, 「ㅅ」の有気性を示すためとおもわれる表記が見られる。「ㄱ」, 「ㄴ」, 「ㄷ」, 「ㄹ」, 「ㅂ」, 「ㅅ」の前に日本語の促音「ツ」を書き込んだものであるが、「ㄱ」の前に1例、「ㄴ」の前に11例、「ㄷ」の前に9例、「ㄹ」の前に12例、上下巻合わせて33例見られる。これら促音表記は、有気音の母音間にあつては促音的效果を持つことを利用したものであるが、有気性を示すために日本語の促音「ツ」を挿入した例は、「全一道人」や「朝鮮語訳」においても見られる。ところで、鍵屋歴史館本には、有気音ではない子音の前に促音「ツ」を付した例が見られるが、すべて日本語訳の「府使」にあたる、「ᄇᆞᆯ{使道}」の表記にあらわれる。「ᄇᆞᆯ{使道}」は、鍵屋歴史館本上下巻合わせて15例あらわれるが、そのすべてに促音(ツ)を付し、「ㄱ」が濃音で発音されたことを示している。欄外書き込みには「少シツメル」と発音についての注意書きが見られる。韓国国立国語院によれば、現代韓国語「ᄇᆞᆯ」の古語である「ᄇᆞᆯ(使道)」は、19世紀の文献からあらわれ、「ᄇᆞᆯ」と書かれていたと推測されるが、「ᄇᆞᆯ」と書かれた例は、文献にはあらわれないとしている。鍵屋歴史館本にあらわれる例をみれば、もともとの表記が「ᄇᆞᆯ{使道}」であり、発音だけが濃音であったため、促音「ツ」を付したと判断できる。慣習的に濃音で発音されていたため、のちに「ᄇᆞᆯ」の表記を濃音にしたと推測される。これは、ハングルの本国資料からはうかがいしれない情報を提供するものである。

(6) 「ㅅ」印

ハングルの左上に小さく「ㅅ」印を書き入れた例が、「ㄱ」に33例、「ㄴ」に2例、「ㅅ」に15

例、「ㄷ」に9例、上下巻合わせて59例見られる。これらは、「ㄱ」、「ㄴ」、「ㄷ」が濃音で発音されたことを示しているとおもわれる。

(7)今後の課題

鍵屋歴史館本は、「講話」の底本に最も近い写本であると思われる。鍵屋歴史館本の公開により、鍵屋歴史館本より後に筆写された「京大本」、「沈寿官本」、「アストン本」との綿密な対照研究が今後の課題である。

参考資料

- 大曲美太郎(1936)「釜山港日本居留地に於ける朝鮮語教育」、『青丘学叢』第二十四号
- 岸田文隆(1998a)「W.G.Aston 旧蔵江戸期明治初期朝鮮語学書写本類」、『5』
『vol.2(歴史)pp.101-124、大阪/北京:国際高麗学会』
- 岸田文隆(2000)「アストン旧蔵江戸期・明治初期朝鮮語学書写本類調査報告」、『青丘学術論集』
17、pp.141-167、東京:韓国文化研究振興財団
- 岸田文隆(2010)「朝鮮語訳の朝鮮語かな表記について(その2:母音について)『訳学書研究
現況 課題』、第2回訳学書学会国際学術会議発表予稿集
- 岸田文隆(2008)「早稲田大学服部文庫所蔵『朝鮮語訳』の朝鮮語かな表記について(その1:子音
について)」、Dynamics in Eurasian Languages、pp.71-102、神戸:神戸市看護大学
- 九州の中の朝鮮文化を考える会(2002)『歩いて知る朝鮮と日本の歴史 九州の中の朝鮮』、東京:
明石書店 p.124.
- 許秀美(2013)「日本国立国会図書館所蔵『朝鮮筆記』のかな書き朝鮮語について」、『譯学 譯学
書』、韓国:譯学書学会
- 許秀美(2016)「朝鮮語学書と歴史資料 - 『講話』を中心に」、『日本語言語文化研究』第四輯(上)、
中国:延边大学出版社
- 許秀美(2018)「鍵屋歴史館所蔵『講話』について」、『龍谷紀要』第40巻第1号
- 金文姫(2018)「近世期日朝対訳資料の研究 - 『隣語大方』を中心に -」、大阪大学大学院言語文化研
究科 言語社会専攻博士論文
- 宋敏(1986)『前期近代国語音韻論研究』、国語学叢書 8、韓国:
- 田川孝三(1978)「対馬通詞小田幾五郎とその著書」、『書物同好会会報』
- 陳南澤(2003)「朝鮮資料」による日本語と韓国語の音韻史研究、東京大学大学院人文社会系研
究科 基礎文化研究専攻 言語学専門分野博士論文
- 朴真完(2012)「가 (苗代川) 」、54、韓国:
、pp.174-178.
- 朴真完(2013)『朝鮮資料』による中・近世語の再現』、日本:臨川書店
- 許仁寧(2014)「『全一道人』」、
、景仁文化社
- 許芝銀(2012)『』、景仁文化社
- 安田章(1964)『全一道人の研究』京都:京都大学国文学会
- 安田章(1966)「苗代川の朝鮮語写本類について - 朝鮮資料との関連を中心に -」、『朝鮮
学報』39/40
- 安田章(1980)『朝鮮資料と中世國語』 笹間叢書 147 東京: 笠間書院

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 許秀美	4. 巻 第40巻第1号
2. 論文標題 鍵屋歴史館所蔵「講話」について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 龍谷紀要	6. 最初と最後の頁 27-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 許秀美	4. 巻 第41巻第2号
2. 論文標題 鍵屋歴史館所蔵「講話」の朝鮮語かな表記について - 子音を中心に -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 龍谷紀要	6. 最初と最後の頁 123 - 138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 許秀美
2. 発表標題 朝鮮語学書の音注について - 鍵屋歴史館所蔵『講話』を中心に -
3. 学会等名 第11回 国際訳学書学会 国際学術会議（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 許秀美
2. 発表標題 鍵屋歴史館所蔵『講話』の朝鮮語かな表記について - 母音を中心に -
3. 学会等名 第6回 中日韓朝言語文化比較研究 国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 許秀美
2. 発表標題 鍵屋歴史館所蔵『講話』の朝鮮語かな表記について - 子音を中心に -
3. 学会等名 第70回 朝鮮学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松原孝俊・岸田文隆編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 九州大学出版会	5. 総ページ数 448
3. 書名 朝鮮通信使 易地聘礼交渉の舞台裏-対馬宗家文庫ハングル書簡から読み解く-	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----